

Title	アルベール・カミュの文学的出発をめぐって：『南』から『幸福な死』まで
Sub Title	Débuts littéraires d'Albert Camus, de "Midi" à "la mort heureuse"
Author	高畠, 正明(Takabatake, Masaaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.129- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルベール・カミュの文学的出発をめぐって

——『南』から『幸福な死』まで——

高 晶 正 明

〈Vocation n'est peut-être pas le bon mot. J'ai eu envie
d'être écrivain vers dix-sept ans〉 Albert Camus.

いまここにカミュの青春を如実に物語る一葉の写真がある。カミュがゴールキーパーとして活躍したフットボールのチームメートのそれだ。そこでは、まるでいたわるように右手をボールの上にあてがったかれは、いかにも精悍な顔付きで、やや俯き加減に前方をみつめている。それはなりよりも、かれが自ら《あの幸せで野蛮な日々》と名づけた時代の記録なのだ。《要するに、ぼくがあれほどチームを愛したのは、勝利の喜びのためなのだ。それが全力を傾けたあとの疲労につながるときは、また格別だった。だが同時にそれは、敗北を喫した夕べに、存分に泣きたいと思うあの馬鹿げた欲望のためでもあった》とカミュが語るとき、⁽¹⁾ぼくらはそこに、なにはともあれ、一つの充足した生を想うことができる。そこには、たとえどれほど貧しかろうと、力いっぱいボールを蹴り、グラウンドをかきめぐる、健康な一人の青年の姿しかないからだ。貧しくはあったが、なにものにもかげがえのない《美しい太陽》が、この青年の頭上には燦々と輝いている。そして、その当時はまだ、貧しさから脱けだし、人生に幸福を求めることこそかれの最大の関心事であれ、文学は、この青年の魂を魅惑してはいなかった。それは、のちにかれがブリスヴィルに、「もっと若かったら、ぼくは書かなくても幸

せでいられただろう」と答えていることからみても推測できよう。(2)

しかしながら結核の発病が（ときにカミュは十七才であった）、ある意味でかれの人生を狂わせたことは想像に難くない。危機にさらされた生命の実感と孤独な療養生活は、かれの精神に内向的な姿勢を余儀なくさせたに違いないからだ。だから、当り前に考えても、結核の発病という事態が、かれの文学への第一歩に一つの役割を果たしたことは疑いない。なぜなら、「生涯のいつ頃、あなたは、自分の作家としての天職をはっきりと自覚したのですか？」というブリスヴィルの問いに、カミュは、「天職ということは恐らく適当な言葉ではありません。ぼくは十七才の頃、作家になりたいと思ったのです。そして同時に、おぼろげながら、自分が将来そうなるだろうということがわかっていました」と答えているからだ。(3)

こうしたカミュ自身の証言にしたがって、いまぼくは、かれの文学の第一歩を、病いをえたその同じ年、つまり一九三〇年と推定し、それにまつわる問題を考察してみたい。と同時に、かれが、天職としての作家を否定していたことにも注目したいのだ。それは恐らく、かれの文学に、ある本質的な問題を提起していると思われるからである。

ところで、カミュがいったいいつごろから文学作品に親しむようになったのか、その時期はさだかでない。ただ「ジッド讃」のなかにつぎのような一節がある。(4)「私が十一才のときだった。私ははじめてジッドと邂逅した。このときカミュに、へきと面白いに違いない」といって一冊の『地の糧』を手渡したのは、当時、カミュの教育を託されていた文学好きな肉屋の叔父 Acault であった。そしてカミュは、そのときの読後感をつぎのように語っている。へこうした祈りは、私にはよくわからなかった。私は、こうした自然の富への讃歌を前にして、しりごみしてしまった。アルジュでは、十六才にもなれば、私にはこうした富には飽きあきしていた。私はきつと、それ以外の富を希求していたのだ。それにまた、「ブリダ、小さな薔薇……」、ああ、だがそのブリダを私は識っていた。私は本を叔父に返した。そして、まあ面白かったと叔父にいった。それから私は浜辺に、気ままな勉強に、ひまな読書に、つまりはどうにもならぬ私自身の困難な生活に帰っていった。出会いは実現しなかった」と。(5)

この一文からも察せられるように、アルジェリアに異常な情熱を燃やし、新しい生命の糧を見出したジッドに、カミュは共感どころかある種の反撥さえ感じていたらしい。おなじような反撥は『手帖Ⅰ』のなかにもみられる。へなにもしくは、ジッドやモンテルランに欠けているのは、そのままじつと六日間も同じ町に滞在を余儀なくされるあの割引き旅行をしなかったことだ、などというとしたわけではない。ただ、とはいってもよくには、実際モンテルランやジッドと同じように物事をみることはできないということがわかるのだ――割引き旅行が原因で⁽⁶⁾。だがヘモンテルランやジッドと同じように物事をみることができない⁽⁷⁾のは、なにも割引き旅行のせいだけではないだろう。たとえば、『地の糧』の《ブリダ、小さな薔薇……》に、《ああ、だがそのブリダを私は識っていた》と語るとき、そこには一介の旅行者ジッドに應えるカミュの自負がありはしないか？ジッドにとってアルジェリアは、生なましい生の情熱をかりたてられるヨーロッパとは異質の地であり、そうであればこそ自己の美意識から意味づけられた「風景」である。が、カミュにとって、それはあくまでも「故国」でしかない。この「風景」と「故国」の相違こそ、《こうした自然の富への讃歌を前にして》カミュをしりごみさせてしまったものに違いない。と同時にそこには、カミュには避けがたい宿命にも似た「故国」を、いま、「風景」に変えてしまった本国の旅行者ジッドに向けられた激しい反撥が感じられる。だからカミュの精神にあつては、アルジェリアはこのときすでにフランスのものではなかった。そして、フランスではなく、故国アルジェリアの文化を築こうとする意図が、はやくからカミュの胸中に一つの自負心として去来していたといっても過言ではないだろう。

ジッド、モンテルラン、マルロー……彼らは恐らく少年時代のカミュが読書で知った作家たちだ。だが、この三人を読んだことでカミュを文学青年と断ずることはできないし、また彼らがカミュを文学にかりたてたわけでもないだろう。それは、恐らく当時の青年たちならほとんど誰しもが接する作家だろうし、第一カミュが、こうした三人の作家を、果してどれほど文、学的に理解していたかどうかは疑問である。それは、いくら十一才とはいえ、さきの『地の糧』の読後感一つをとってみてもいえることだ。そうした読後感は、文学的というより、むしろ文学以外の幅広い使命感をいだいている青年のそれに近い。そして『手帖Ⅰ』のなかにあるつぎの一つの叫びは、こうした使命感の一端を披瀝していたともいえる。《ぼくは証言しなければいけない。いうべきこと、はっきりと見るべきことは

ばくには一つしかない。ぼくは、貧しい生活のなかで、また、つましやかな、あるいは虚栄心の強い人たちのなかで、これこそ人生の真の意味だと思われるものにもっとも確かな手ざわりでふれた。そこでは、芸術作品だけでは決してじゅうぶんではないだろう。芸術はぼくにはすべてではない。せいぜいそれはひとつの手段でなければならぬ」と。ともかく、少年時代にカミュが文学書を片端しから読みあさったという形跡はないし、恐らくは生活の不如意が、それを妨けたろうことはじゅうぶんに推察できるのだ。カミュが積極的に読書と取り組んだのは、むしろ二十才を過ぎてからのことだ。たとえば一九三三年にはブルーストを、三六年にはエピクテトス、パスカル、キルケゴール、マルロー、ジッド、三九年にはエピクレスとストイシアンたちを、四一年にはトルストイ、マルク・オーレル、ヴィニ、サド、ピエール・ラリヴェを、四二年にはメルヴィル、デフォ、セルヴァンテス、バルザック、ラファイエット夫人、スピノザをそれぞれ読んでいたことが「伝記」に記されている。もちろんこうした読書は、なんらかの必要があって、とくに読まれたのであろうし、これだけでかれの読書の質や幅をおしはかることはできないが、《かれ（カミュ）は、その時代の文学の声を反映する作家たちに属していない……一八九五年から一九三三年という時代が存在しなかったと想像すること、カミュのすべてを説明することができらう》というアルベレスの指摘は、かなり当をえた指摘であるといわねばなるまい。

要するにカミュは、他の多くの作家たちがそうであるような意味では文学青年ではなかった。少なくとも少年時代のカミュは、文学を自分の天職とは信じていなかった。もしかれが文学に接近したとしても、それは、自分の人生の真の意味だと思われるものを、素朴に、ただ無性に、語りたいだけだった。だからこそまたカミュには、アルベレスのいうように、一八九五年から一九三三年という廿世紀のフランス文学の黄金時代が存在しなかったかのごとくに見えてしまうのだ。かれが直接影響を受けたのはもっと卑近で素朴な作家、たとえばアンドレ・ド・リシヨのような作家であった。そのリシヨについて、やはり「ジッド讃」のなかで、かれはつぎのように語っている。へ……私はジャン・グルニエに出会った。かれもまた他のものと一緒に一冊の本を貸してくれた。それはアンドレ・ド・リシヨの小説で、『苦悩』という題だった。私はアンドレ・ド・リシヨを知らない。だが私は、あの美しい本を決して忘れはしなかった。それは私の知っていること、つまり母親や貧苦や美しい空のことを私に語った最初の本だった。決まりどおり、私は一夜

にしてこの本を読んだ。そして目ざめると、不思議な新らしい自由を身につけた私は、ためらいながら未知の大地を踏みしめていた。本というものが、単に忘れられたり気晴らしの道具になるばかりのものでないことを、私はたったいま知ったばかりだった。私の頑な沈黙、おぼろげで、しかも価値あるこうした苦悩、奇妙な世界、私のなかの崇高さ、貧苦、それに私の心の秘密、こうした一切は、だから、表現できる筈だった……『苦悩』は、当然ジッドから入るはずだった創作の世界を私に垣間見させてくれたのだ。⁽⁹⁾カミュがグルニエと邂逅したのは一九三〇年のことであるから——従ってカミュが十七才のときだ——、この『苦悩』を読んだのも恐らくはその頃であろう。そして、もしいまのカミュの言葉を信じていいなら、『苦悩』によって、その頃やっとカミュは書くことを知ったといえる。たとえそれが芸術ではなくても、へ頑な沈黙、おぼろげで、しかも価値あるこうした苦悩、奇妙な世界、私のなかの崇高さ、貧苦、それに私の心の秘密、こうした一切⁽¹⁰⁾を語るといふこと、それはカミュにとって、やはり素晴らしいことであつたに違ひなかった。

アンドレ・ド・リシヨの『苦悩』を読んで『創作の世界を垣間見た』ちようどその頃、カミュは結核の最初の発病を体験している。こうした病いが、かれの感受性を、生の歓喜と死の陰影⁽¹¹⁾に一層鋭敏ならしめたことは想像に難くないし、またかれを、書くことに近づけたとしても不思議はない。そして、一種の同人誌風の雑誌『南』が創刊されたのもちようどこの頃のことであつた。

雑誌『南』⁽¹¹⁾は、『文芸月刊誌』として、一九三一年十二月にアルジェで発刊された。表紙には『Dans ce numéro』として Henry de Montherlant, Claude-Maurice Robert, Robert Dounon の三人の名が記され、このほか表紙には記載されていないが、Roger Nicolas, Pierre Costa, Max Pol Fouchet, Serge Fuster などといった有名無名の作家たちが、それぞれ執筆者として名を連ねている。この創刊号に執筆していないモンテルランの名が、なにくえ表紙に記載されているのかその理申はわからぬが、匿名で書かれた巻頭言は、この雑誌の性格の一端を如実に物語っているものといえよう。

〈巻頭言〉

ここに一つの新しい雑誌が生まれた。我われはこれを長期にわたって刊行したり、華麗で壮大な読物をこれに課するつもりはない。我われはただ読者に、その抱負からではなく、それを読んで『南』を批判していただきたいと願うばかりだ。

たった一つのことだけ明らかにしておきたい。ここでは、フランス文学の雑誌が問題なのではなくて、要するにどこまでもアフリカのそれであるとする刊行物であることが大切なのだ。本国の知的世界で生起する出来事は我われの興味をひく。だが我われは、それを、本国の雑誌から知る。ここでは、なによりも我われの北アフリカが問題なのだ。北アフリカは今後、まったくそれ自体の文学、芸術、生活を持つことになるだろう。我われは、こうした生活の一つの反映でありえれば幸いである。そしてかかる生活こそ、我われがこの雑誌で、常に真先に取りあげるものとなるだろう。

我われは、我われの協力者についてはなにもいわない。彼らはそのほとんどが北アフリカの読者のあいだで知られた名前の持主だ。それが我われの読者への一つの保証である。

友たる読者諸君、我われを批判するのは君たちだ。

『南』

簡単だが若々しい生氣と野望にみちた巻頭言ではないか？そしてそこには、本国の文学芸術界にたいする新鮮な挑戦がある。しかもこの巻頭言は、のちに掲げる一九三九年にカミュが主宰して創刊された雑誌『リヴ・ヴァージュ海辺の国』の序言と、多くの点でその調子を同じくしている。⁽¹²⁾ 実際、この巻頭言がカミュによって書かれたという証拠はどこにもないが、かれの手によって書かれなかったという保証もまたどこにもない。そしてこの雑誌の十一頁には、P. Camus. と署名のある一篇の詩が掲載されていた。

Poème

詩篇

L'horizon fuit
Et c'est la nuit.
L'oiseau qui pleure
Annonce l'heure
Où le serein
Partout éteint.
La vie si brève,
La vie de rêve
Où nous souffrons,
Où nous pleurons.

地平線がかすんでゆく。
そう それは夜。
泣く鳥が
時刻を告げ
青空が
いたるところで消えてゆく。
それほど短い人生、
夢の人生
そこで僕らが苦しみ、
そこで僕らが泣いている。

Une tristesse
Laisse mon coeur
Sans joie ni liesse.
Où est ma soeur?.....
Ma soeur d'amour !
Ma douce amie !
Tendre secours

僕の心が
一つの悲しみを残してゆく
喜びも歓喜もなく。
僕の妹はどこ?.....
僕の恋する妹は！
僕のやさしい恋人は！
憂い多き日々の

Des jours d'ennui.....

Où sont ses bras,

Sources de joie ?

やさしい救い.....

喜びの泉のような、

あの女の両腕はどこ？

Sur l'eau qui rêve,

Cette heure est brève

Et le jour meurt

Malgré mes pleurs.

L'arbre frissonne

Au vent d'automne.

Malgré mes cris,

La lune luit,

L'horizon fuit,

Et c'est la nuit.

夢見る水の上で

この時刻は短かく

そして日は滅ぶ

僕の涙も知らないで。

木がふるえている

秋の風に。

僕の叫びも知らないで、

月は輝き、

地平線がかすんでゆく、

そう、それは夜。

P. Camus-

P・カミュ

なんとも稚拙だが、多感な青年の心を思わせるいかにも牧歌的な詩だ。この P. Camus が果してアルベール・カミュの当時の筆名であるか否かを決定する証拠は残念ながらないが、もしこれがアルベール・カミュだとすれば、当時かれはまだ十八才であった。逆に考えると、まだ文学に漸やく首を突っ込みはじめたばかりの初心な青年カミュが、敢えて筆名を使ったことは想像に難くない。現在まで

に知られているカミュの詩は一篇しかないが、昨年刊行されたプレイヤッド版アルベール・カミュ、エッセエ集Ⅱに収録されたそれらの詩を、⁽¹³⁾いまの詩と比べてみるのもあながち無駄ではあるまい。その一つは、「世界をのぞむ家」と題されているが、その「世界をのぞむ家」は、カミュの未刊の小説『幸福な死』に登場しているものであり、また『手帖Ⅰ』の一九三五年の断章のそこにも散見されるから、それが三五年前後に書かれた詩と推定しても大して誤りではないだろう。つまり、『南』に載った詩がもしカミュのそれだとすれば、この二つの詩篇の創作年代には、さしたる開きはない筈である。

La Maison devant le monde

世界をのぞむ家

J'avais des camarades,

僕には友だちがあった。

Une maison devant le monde

それは世界をのぞむ家。

Dans le matin et le soir immenses

壮大な朝な夕なに

La Journée tournait ronde

僕らの沈黙の周囲を

Autour de notre silence.

一日が円くまわっていた。

Là où s'arrête un monde,

世界が停止するそこに、

Prend naissance une amitié,

自由を定める

Désir têtu de transparence

あの透明さへの欲求である

Qui définit la liberté,

一つの友情が生まれるそこに、

Notre maison avance.

僕らの家は進んでゆく。

Mais dans tout le ciel bleu,

Le monde rit, indifférent.

Camarades de quelques heures,

La vie est un sourire errant,

Miracle d'aimer ce qui meurt.

だが青い空全体のなかで

世界は無心に、笑っている。

数刻の友たち、

人生はとりとめのない微笑、

滅びゆくものを愛することの不可思議。

先の「詩篇」の牧歌的な感傷に比べると、この「世界をのぞむ家」はかなり観念的な詩である。だが、不思議とこの二つの詩には似ているところがある。詩型の上からいえば、韻は一応きちんとふまれているものどこかぎこちないし、第一、そこには音楽的な豊かさや旋律が欠けている。それに詩句は短かく、途切れ途切れだし、句読点の多用が目立っている。つまり、あまりにも素人じみた拙劣さがある。では内容的にはどうかといえ、一方では感傷が、他方では観念がいかにもむきだしだし、強いて両者に共通する主題を求めれば、それは永遠の形相をとどめぬ東の間の世界の姿、つまり遁走する世界と、それをとどめんとして止めぬ人間の悲しみであろう。ただ、「世界をのぞむ家」では、「Le monde rit, indifférent」とか「La vie est un sourire errant」といった、いかにも後年のカミュを思わせる決定的な言葉が見つかるのにたいし、前者では、「La vie si brève」のように、いささか幼稚に過ぎると思われる言葉が目立つ。もっとも、もしこれがカミュの作だとした場合、十八才のときに書かれた前者の「詩篇」と、廿二才前後に書かれた後者とのあいだに、たとえかなりの開きがあってもそれは当然といわねばならぬだろう。

このように、さまざまな推測は可能であるにせよ、『南』の「詩篇」がカミュの詩であることを決定する確実な根拠は、現在のところわれわれにはない。ただ、カミュ全集の編者ロジェ・キヨ氏の証言によれば、カミュがこの雑誌に関係していたことは確実であり、一九三二年の三月号には《Jehan Rictus》が、また同年六月号には《Essai sur la musique》と《La Philosophie du Siècle》が、それ

ぞれカミュの手により執筆されている。⁽¹⁴⁾とすれば、この「詩篇」がカミュの作であるとする可能性もまた一段と強まるのである。

ところで、この「詩篇」とカミュの関係を推定するに足るもう一つの重要な資料がこの同じ雑誌にある。その資料というのは、例の「詩篇」の次頁に《P. C》と署名のある、ごく短い小説のエスキスだ。ちょうどジツドの『アンドレ・ワルテルの手記』の冒頭を思わせる日記風の小説は、『Le dernier Jour d'un Mort-né』と題されており、その題名からいっても内容からいっても、カミュのかくれた処女作である未刊の小説『幸福な死』に、きわめて酷似しているのだ。表題にある《Un Mort-né》がまず第一に意味深い。《Un Mort》は《一人の死者》だが、その《死者》は、同時に《né》、つまり死と同時に《生まれた者》を意味している。だから、この《Un Mort-né》を意訳すれば、《死に生を見いだした者》ということであり、それこそ実にのちの『幸福な死』の中心主題をなしているのだ。僅か二頁にも満たないこの小説は、さきの「詩篇」との関連においても、また『幸福な死』との関連においてもきわめて重要なものであるので、以下に訳出することしよう。

『死に生を見いだした者の最後の日』

「私はこの草稿を、私が夏休みを過ごしたホテルの部屋のひきだしのなかで見つけた。文学的な価値はないが、それは私の興味をひいた。私はこの驚くべき青年の名前や運命を知りたいと思った。かれは神への道を感じていたが、それを保ちつづけることができなかったのだ。だがホテルは最近所有者も人も変わったばかりだった。

そしてこの私自身、一晩ぐっすり眠ったあとでこの短篇を書きながら、最初はそれがなにを意味しているのか、まったく分らなかった。

P. C

アルジュ、一九三一年九月二八日～二九日。

ぼくがこれを書くのはぼくだけのためだ。そして多分、ぼくは最後までたどりつけないだろう。というのは、そうしたからといって、いったいなんの役に立つのだ？ それはただたんに、このあまりにも長くて短い一日を、ぼくの存在が達成される本質的な一日を、つぶそうとするだけなのだ。

ぼくは十八才だ。ぼくは、あの優しくておとなしかった、それに病身だった少年時代をあまりよく覚えていない。十二のとき、ぼくはある私立学校の寄宿生になった……そこでぼくは、たちどころに優等生の一人となった。つまり熱心に勉強し、その行動は非のうちころもなかったのだ。ぼくはあらゆる外出を断っていた。ただときおり、知り合いのところで食事をしたくらいで、それは、子供のいない老夫婦だった。ぼくはあらゆる時間を勉強に費やしたが、なぜかはしらぬがぼくは勉強が好きだった。それでなにかを学ぶというより、むしろそれ自体が好きだったのだ。ぼくは、それが本当に必要であるかどうかを決して確かめようとせず、最良の生徒になりたかったのだ。

ぼくにはきちんと確立された原則があった。神、不死の魂、他人のために生きること、物質的快楽をなによりも軽蔑すること、など……がそれだ。ひとことでいえば、ぼくは、もっとも身持ちの良い青年、この上もなくまじめな青年、そして実践的なカトリックだった。

しかしぼくは、それから今日に至ったのだ。

Rでの夏休み……今朝、遠出をした。山から降りてくるとき、ぼくは若い人妻に出会った。彼女が美しかったかどうかは分らなかった——ぼくは彼女の姿を見て茫然としていた。これが恋だ、とぼくは自分にいきかせた。ぼくは自分の古典的な知識や小説のさまざまな断片の記憶の糸をたぐってみた……そのどれ一つをとってもぼくが感じていることは違っていった。恋についてのぼくの既成概念は、両者の道徳的昂揚とか、家庭をつくることだったのか？ ぼくはそんなものはなにも欲しくなかった。ぼくは彼女が欲しかった。彼女はきさくな女だった。ぼくらは会話をかわした。そしてぼくの欲望は恋を無限に超えていたし、ぼくの歓喜は純粋で全的なもの

だった。ぼくは、ぼくの胸に彼女の両の乳房が圧しつぶされるのを感じた。ぼくの唇の下には、彼女の目が、彼女のうなじが、彼女の唇があった……

しっかりと抱きしめあって、ぼくらは互いに相手を讚美し合った。明るい甘い声で彼女はぼくに愛らしい言葉をいい、軽くぼくを咎めだてするのだった。こうしたことは、ぼくはそれまでまったく知らなかったのだ。なにも考えなかったし、ただひたすらに官能だけで生きていた。要するにそれは新しく生まれ変わった者が、その最初の化粧の間に抱くに違いない印象だった。突然ぼくの記憶は作動しはじめ、一つの言葉をぼくに告げた。姦婦だと。そして《肉欲のなせる業》だという一節を。崇高なかかる思念を思い浮べたとき、ぼくはなにかがぼくのなかから喉までこみあげてくるのを感じた。ぼくは息苦しくなった……そして突然、こらえきれずに、氣違いのようにけたたましく笑った。彼女は驚いてあとずさりした。ぼくは相変らず笑いながら、山を目指して道をかけ去った。

走ったのと笑ったのとで精魂つき果てたぼくは、露わになった岩の上に倒れた。もうなにも分らなかったし、もうなにも感じなかった。ただ、ぼんやりとした想念にとらわれていた。ぼくは、生まれつつある自分を想像していた。部屋があって、ぼくの母親が寝台に横たわって、一人の医師と白いゆりかごがあった。このぼくはどこにいるのか分らなかった。だが背丈は現在のぼくで、いま着ている洋服を身につけていた。医者が話した。ぼくはかれの言葉がききとれなかった。だがぼくは、かれが、ぼくは生きられないだろうといっているのが分った。ぼくは泣いていた。そして《生きたい！》と叫んだ。

それからさまざまなことを考えた。ぼくにはもうなにもない、ぼくはもうなにも信じていないと。こんな風にして生きることが不可能だった。ぼくは自分の中の「道徳」を殺した。ぼくにはもう、目標も、存在理由もない。ぼくは死んでゆくのだ。

目を開くと眼下に巨大な森が見え、その奥には河が、そして正面にはまたもや森や、ぼくの背後とおなじように、高くそびえたった灰色の巨大な岩山が見えた。ぼくはもっとよく見ようとして立ち上がった。それはまるで、これほど感動的な景色をいまだかつて一度も見たことがないかのようだった。そのとき、いっとき微風が吹いた。ぼくはその微風と一体になったかのように感じた。ぼくはその一部だった。すると前代未聞の歓喜がぼくの心を晴ればれとさせ、ぼくを溶けこませてくれた。ぼくは歌いたかった。歓喜の雄叫びを

あげたかった。だがたちどころにばくは、ばくの悲しい思念、ばくの空虚、ばくの無力に気がついた。

いまばくは部屋にいる。ばくはこれを書いている。気持は少し鎮まり、ずっと冷静だが、それでもなお、ばくの精神状態は同じだ。ばくの理性は、こうした喜びの生命を拒否している。一体それはなにが要求するのだろうか？ ばくの肉体なのか？ 人にいわせれば、それはばくの意識ということだ。ばくは気違いなのだろうか？ 今宵、もしばくが激流に身を投げにゆかぬとしたら、それはこの怖れおののく新しいばくが死んで、古いばくを生き長らえさせるからだろう。いづれにせよその新しいばくは、たった一日しか生きぬのだ。要するにそれは、死に生を見出したものなのだ。」

この、小説のエスキスともコントともつかぬ一文のなかには、のちのカミューを思わせる断章があまりにも多過ぎる。たとえば前述した表題の《Un Mort-ne》にしたところでそうだ。《死》と《生》という対立的な事象が同時に共存する、そこにこそこの不条理の認識の萌芽がありはしないだろうか？ しかも自らの死の情景を想像するとき、かれは《生きたい！》と思わず叫ばずにはいられない。それに、第二段目の冒頭にある《ばくは十八才だ》というくだりや、《十二のときばくはある私立学校の寄宿生になった……》にしても、あるいは単なる偶然かも知れぬが、そのときどきのカミュー自身の年令とまさしく合致している。第一、《純粹で全能的な生の歓喜、みずみずしい鮮烈な欲望、それは、『結婚』のなかにみちあふれる生の歓喜と相和してはいないか？ それだけではない。『異邦人』のムルソーさえこのなかに生きている。《それからさまたまなことを考えた。ばくにはもうなにもない、ばくはもうなにも信じていない。こんな風にして生きることとは不可能だった。ばくは自分の中の「道徳」を殺した。ばくにはもう、目標も、存在理由もない。》という箇所がそれだ。ここではその文体までが、あの簡潔で直載な『異邦人』のそれに似ている⁽¹⁵⁾。そして最後に、本来ならかれの処女作となるはずであった『幸福な死』との関連が問題にされるのだ。

『手帖Ⅰ』によると、一九三五年にはこの『幸福な死』のノートが散見されるから、『幸福な死』の執筆は、すでにこの頃はじめられたことは確かである。それに、ロジェ・キヨの指摘するところによれば、⁽¹⁶⁾この作品の冒頭はマルローの『人間の条件』の冒頭にきわめて酷似しているといわれ、しかもその『人間の条件』は一九三三年に刊行されたものであるから、とすればこの作品が書かれたのは、やはり三三年以後ということになる。いずれにせよこの作品は三五年にはすでに構想されていたものであり、『南』の短篇がカミュのものとすれば、その間は僅か四年でしかなくなる。

ところで、この『幸福な死』は三部に分かれていて、第一部は『La Mort Naturelle』、第二部が『La Mort Consciente』となっている。⁽¹⁷⁾第一部では冒頭にザグルー殺害の場面が書かれ、それから一種の回想形式をとりながら物語りが進行する。そこではたとえば、『手帖Ⅰ』にあるように、⁽¹⁸⁾『貧民街の物語』、『性的な嫉妬の物語』が中心で、またさらには、メルソーとザグルーの対話が重きをなしている。ザグルーはメルソーに、かれの「不快」の大半は貧苦のゆえだといひ、幸福であるためには時間を買わなくてはならぬこと、そうしてこそはじめて自由に生きることが可能であると、⁽¹⁹⁾暗に自己の殺害を示唆する。第二部では、ザグルーを殺して得た金で、メルソーはヨーロッパに旅立つ。そして惨憺たる暗い旅を続けたあとで、かれはアルジェに舞いもどり、クレール、ローズ、カトリヌのいる「世界をのぞむ家」にきてはじめて自由を、幸福を味わう。燦々と降り注ぐ太陽、輝く青い海、それがメルソーに、はじめて官能的な生の歓びを教えてくれるのだ。やがてかれはリュシエンヌという一人の女と出会い、彼女と結婚する。ついでメルソーはアルジェの郊外の漁師町に家を立て、医師ベルナル、⁽²⁰⁾漁師ペレスとともに平和で牧歌的な生活を営むが、ザグルー殺害の日が発病した結核が再発して息をひきとる。以上がこの未刊の小説の概略であるが、⁽²¹⁾『La Mort Naturelle』→『La Mort Consciente』→『La Mort Heureuse』というその構成自体が、この小説の主題を提示している。それは、この『La Mort』を『La Vie』と置き換えてみればよくわかるのだ。前記の構成は、同時に、『La Vie Naturelle』→『La Vie Consciente』→『La Vie Heureuse』ということになるのだ。つまり第一部の『La Mort (La Vie) Naturelle』とは、⁽²²⁾時間を自由に使いこなせぬ人生、幸福であるために必要な時間を買うことができず、時間によって逆にしぼりつけられる人生を物語っている。具体的にいえば、ザグルーを殺害するまでのパトリス・メルソーの貧しい生活がそれ

であり、だからこそ、回想形式によって語られるザグルー殺害までのメルソーの物語りが第一部をなすのであろう。この場合の《*tirelle*》とは、だから、いやおうなく時間に従属させられることであり、そのような（人）生であればこそ、そこに迎える死もまた自然のものでしかないのである。こうした事情をそっくりそのまま裏返せば、第二部の意味はおのづから判然としてくる。つまりそれは《幸福になるためには時間が必要で》、その時間を買うに必要な金をにぎったメルソーの生活である。かれは、今度は、自分の人生を意のままにすることができる。つまりそれは、取捨選択された人生であり、生の歓喜を求め、またそれだけで構成される《意識された》生である。であればこそ、そこで迎える死もまた《意識された》死であり、はじめて死が生の一環として意識される《幸福な死》となるのである。ここで、幸福な生は幸福な死と共存するという感覚をメルソーが覚えることの小説の最終章の一部を要約してみよう。⁽²⁴⁾

ル・シェヌアの別荘で病いの床にふし、一ヶ月後に小康状態を迎えたある朝、メルソーはふたたび春の訪れた戸外に出、潮の香りと咲き乱れる花々の香りに強い感動を受けてしまう。《相変らずすわったままのメルソーは、そのとき、幸せがどれほど涙に近接したものであるかを感じるのだった。一切合切はあの無言の高揚のうちにある。ここでは、ひとの人生の希望と絶望が互いに交錯しながら織りなされているのだ、と。意識をもちながらしかも無縁で、情熱に燃えながら無関心なメルソーは、かれの人生自体が、そしてかれの宿命がそこにきわまるのだということを、また、これからのかれの一切の努力は、こうした幸福に甘んじ、その恐ろしい真実に直面するよう心がけることだということを理解するのだった》。その夜メルソーは、月光に輝く海に身をひたし、《かつて生の存在理由となりえたもののなかにこそ、死の存在理由があることに気づくのだった》。つまりかれは、生の歓喜そのもののなかにこそ死の歓喜も同時に存在することを悟るのである。そしてふたたび死の床にいたメルソーは、《自分の意識を最後の最後まで持ちつづけ、両眼を見開いたまま死んでゆく》と決意する。《かれは、この数年にわたって緩慢な解体をたどってきたのだ。いまやかれは、そうした解体の曲線を完成した。そしてかれは、まもなくメルソーをはなれ、かれを世界に戻してやろうと試みるのだった……。……かれはリュシエンヌのふくらんだ唇と、彼女の背後の大地の微笑みをみつめた。かれはそれらを、おなじ視線、おなじ欲望でみつめていたのだ。『あと一分、あと一秒』とかれは考えた。鼓動が止まった。そして、小石にまじる一粒の小石となって、かれは、不動の世界の真実をにな

った心の歓喜にかえっていった。」

この小説はここで終っている。だが、このなかには、あの『南』のエスキスと本質的に酷似した主題があることに気づくだろう。『……最後の日』の《いつとき微風が吹いた。ぼくはその微風と一体になったかのように感じた。ぼくはその一部だった。すると前代未聞の歓喜がぼくの心を晴ればれとさせ、ぼくを溶けこませてくれた》は、大地と一体になり、大地に溶けこむ死に歓喜を覚えるメルソーそのものだ。それに、はじめて味わった官能的な生の歓喜こそ同時に死であり、その日が最後の日であるという一日こそ、意識された生であり、それが同時に意識された死であることを物語っている。しかも『幸福な死』の最終章や『……最後の日』に使われる《monter》という動詞(あるいは《monter》⁽²⁵⁾)は、それが嗜血を意味すると同時に、身内からこみあげる生の歓喜でもある。つまりその《monter》は生の噴出であり死の噴出である。そして最後に、「生と死」という二律背反の事象の調和と統一こそ、両者に共通する主題である。とすれば、『南』の『……最後の日』がアルベール・カミュの手になった作品であることは、もうほとんど疑う余地のないことであり、従って《P・C》というイニシャルは『詩篇』の《P. Camus》を物語り、またその《P. Camus》がアルベール・カミュの筆名であったことも、恐らくは事実と違いない。またこうした仮定を一步ゆずって、『……最後の日』がもし余人の作品であったとしても、少くともそれが明らかにカミュの『幸福な死』の典拠になったということは指摘できる。が、しかし、これだけの酷似は、もはや下敷きや盗作以上の問題を含んでおり、恐らくこうした第二の仮定は真实性にとほしいであろう。そして、これまでの推定をたどってゆくと、カミュの文学的出発は、雑誌『南』の創刊と期を同じくするものであり、カミュが十八才のときに書いた『詩篇』と『死に生を見出した者の最後の日』が、かれの出発をかざる作品であったことになるのだ。

これまで述べたことからあきらかなように、『幸福な死』は、作者のきわめて現実的な意図から書かれた作品である。つまりそこでは、かれの人生のあるべき姿や実現されねばならぬ夢が重きをなしているのであって、作者は、文字で実現されたそうした生活にひとり陶醉しているのである。いいかえれば作者は、現実には恐らくは実現されぬであろう生活の夢を、それだからこそ余計に書き加った

たのであり、したがってこの場合、書くことは、作家としての天職の問題ではなかったのだ。だからその文学的出発に際して、カミュには、『芸術』である文学作品を書くとする意図はほとんどなかったといっている。それには、本国の作家たちのように、前世紀末にはじまる象徴主義の美学の洗礼を受けなかった、植民地人としてのカミュの特質の一面があらわれている。そして象徴主義の美学のかわりに、また植民地人であり、アルジェリアに生をうけたがゆえに、かの『南』の巻頭言にあったように、新しい文化圏、東西文明を融合した新生国家を築こうとする当時のアルジェリアの知識人たちの動向が、かれの文学的出発に大きな影響をもたらしたのであった。そしてさらに引用した『ジッド讃』の一節にもあったように、カミュはジッドではなく、アンドレ・ド・リシュオーから創作の世界に入っていたのである。だから、リシュオーから影響を受けた、あの心の秘密を語り、貧しい少年時代の苦しみを、幸福の希求を語ることは、『新地中海文化圏』を築こうという青年の夢や抱負と結びついて、当然そこに証言としての性格をもつ文学が生まれたのであった。こうした問題は、のちのカミュの文学に決定的な影響を与えずにはおかなかった。そしてたとえ『異邦人』がどれほど美学的な意味をもちえようと、それはむしろおのづからそこににじみでたカミュの芸術家としてのすぐれた資質によるものであって、その意図自体はむしろ美学的なものではなかったといえよう。⁽²⁶⁾そして、あとは『ペスト』はもとより『転落』にいたるまで、劇作品を含め、カミュの文学がなによりも「証言」の文学であったことに注意を払う必要があるだろう。

こうした証言としての文学も、無論、初期と晩年ではその質に変化がみられるが、『幸福な死』が最後まで完成されなかったことは、証言としての文学の一面の欠陥を露呈したものであるとして甚だ興味深く思われる。というのは、そこでは、幸福な生の希求という主題があまりにも生なましましたために、素材が作品として発酵するに必要な距離に欠けていたのである。たとえば、とりわけ第一部で、幸福であるには時間が必要だ、その時間を購うには金が必要だ、というあまりにも当り前で現実的な、また素朴なモチーフに従って物語りが進展するとき、より高次の現実として機能する虚構の世界は、おのづから崩壊してしまう。逆にいえば、あくまでも現実的な要請である筈のこうした認識は、実生活で追求されてこそはじめて意味があるのであって、それが一作中人物の性格づけとして描かれるならともかく、一作品の一つの主題となるべきではなかったのだ。いいかえれば、その主題はあまりにも現実的であったがために、かえってそ

のリアリティを欠いてしまったのである。のちにカミュは、『芸術には羞恥心の動きがある。それは、ものを直援には語らない』⁽²⁷⁾と述べているが、とすれば、この種の羞恥心が、カミュの文学創造の当初には欠けていたのであった。

なにはともあれ、十七才のときカミュが作家になろうと思いついたことは間違いない。ただその場合、かれの意図する作家は、かれの天職でもなければ一人の芸術家でもなかった。そして、その文学的出発に際し、一方では「新地中海文化」の建設をめざし、他方では「私のなかの崇高さ、貧苦、心の秘密」を語りうとする意図は、一九三五年以後互いに影響しあいながら二つの軌跡を描きだすことになるのだ。前者は、小説ではなくエッセエという「証言の文学」にふさわしいジャンルで、つまり、一九三五年に着手された『裏と表』や三六年に着手された『結婚』で、はじめて見事な成果をかちえたのであった。そして後者の夢は、三五年の「労働座」の設立や「文化の家」における活動、また三七年の「仲間座」の設立や、『アルジェ・レビュブリカン』の記者としての活躍となって、やがて実現を見たのである。

註 GE. T. R. N. ¹ Œuvres d'Albert Camus, Théâtre, Récits, Nouvelles (Bibliothèque de la pléiade, 1962) の略記。

GE. E. Œuvres d'Albert Camus, Essais (1965) の略記である。

- 1 《Hédomadaire du R. U. A.》, GE. T. R. N. p. XXVIII.
- 2 《Réponses à Jean-Claude Brisville》 (1955), Camus (La Bibliothèque Idéale) p. 257
- 3 《Réponses à Jean-claude Brisville》, p. 256
- 4 《Homages à André Gide》 (N. N. R. F.)
- 5 《Carnets I》 p. 93
- 6 《Carnets I》 p. 16
- 7 GE. T. R. N. p. XXVII
- 8 《Homages à André Gide》 (N. N. R. F.)
- 9 未刊の小説『幸福な死』や『裏と表』は、それぞれ「こうした一切」から生まれた作品であることは想像に難くない。なお《Carnets I》の冒
- 10

頭の章句(三五年五月)もこれと同様のことを語っている。

11 《Sud》。——Revue Mensuelle de Littérature et d'Art——(Etiablie en 1931)

12 《Rivages》——Revue de Culture Méditerranéenne——(Etiablie en 1938) : O. E. p. 1329

この二つの巻頭言のスタイル自体はどの類似が顕著であるか、同じで、その三の箇所を指摘するにしようとした。

Nous demandons seulement à nos lecteurs de juger Sud d'après sa lecture……(S)

……il est difficile à《Rivages》d'apporter avec elle sa définition puisqu'aussi bien son but est de se définir……(R)

l'Afrique du Nord a désormais une vie littéraire et artistique bien à elle : nous voudrions être l'un des reflets de cette vie. (S)

《Rivages》, née de la spontanéité, exprimera dans la liberté plus subtile issue de la domination sur soi, une culture, des pensées, des mouvements dont nous sommes tous ici solidaires……(R)

やうして恒常なものである。《C'est une garantie pour notre public》(S), 《C'est……une garantie pour ses lecteurs》(R) である。

13 GE. E. p. 1207. 《Poème Sur La Méditerranée》, 著者 GE. E. P. 1329 《La Maison Devant Le Monde》の一篇である。

14 GE. E. p. 1194, p. 1200, p. 1203,

15 《Puis des idées : je n'ai plus rien, je ne crois plus à rien. Impossible de vivre ainsi. J'ai tué en moi la Morale. je n'ai plus de but, de raison d'exister, je vais mourir》

16 GE. T. R. N, p. 1904

17 《La mort heureuse》, (Frappé par Mme Belly. Mai-Juin 1961, Inédit) は、草稿の状態で未完結である。

18 《Carnets I》p. 25

19 c. f 《Carnets I》p. 96 《L'Argent, C'est par une sorte de snobisme spirituel qu'on veut essayer de croire qu'on peut être heureux sans argent.》

20 《Carnets I》(p. 96) に記述する Cvikinsky (カシタの実際の友人で、アルジェの医師、哲学者) がそのモデルである。

21 小説『異邦人』に登場する養老院でのメルソーの母親の友人と同名である。

22 《Carnets I》p. 96~97 は、キヨ氏の注にあるように、『幸福な死』のこの部分の断章である。『手帖』では、メルソーの自問自答の形で書かれているが作品では、ザグールがメルソーにいかせる言葉として使われている。

《L'Argent. C'est par une sorte de snobisme spirituel qu'on veut essayer de croire qu'on peut être heureux sans argent. ça c'est le

seul problème qui m'ait jamais intéressé. Il est précis, Il est net.

Voyez-vous Mersault, pour un homme «bien né», être heureux n'est jamais compliqué. Il suffit de reprendre le destin de tous non pas avec la volonté du renoncement comme tant de faux grands hommes mais avec la volonté du bonheur. Seulement il faut du temps pour être heureux. Beaucoup de temps. Le bonheur lui aussi est une longue patience. Et dans presque tous les cas, nous usons notre vie à gagner de l'argent, quand il faudrait, par l'argent gagner son temps. Et le temps, c'est le besoin d'argent qui nous le vole. Le temps s'achète. Tout s'achète. Être riche, c'est avoir du temps pour être heureux quand on est digne de l'être.》

《Carnets I 》 p. 97

《La Mort Heureuse 》 II Partie, Ch. V

25 《……Je sentis quelque chose monter en moi. Jusqu'à ma gorge, j'étouffais……》

《En lui montant lentement, comme depuis le ventre, un caillou qui cheminait jusqu'à ma gorge Il respirait de plus en plus vite, profitant des passages. Elle montait toujours……il éprouva la lente montée en lui.

26 『異邦人』が当初は『小説』であり、のちに『物語』に称せられたことには、いうとした証言としての文字の事情が関与しているように思われる。そしてカミュー自身『手帖』のなかで、『異邦人』は、当時のアルジェリヤなら、この街角にでも見かけることのできる青年を主人公にしたものだ、と語っているし、また『異邦人』という作品自体は、『幸福な死』の第一部の第二章が母胎となったもので、もとはといえば、『幸福な死』の主人公メルソーの生活の一端が語られていたものだ。

27 《Carnets II 》 p. 107

28 なな参考までに資料として、『南』の巻頭言と、『死に生を見いだした者の最後の日』のテキストをここにあげる。

I Présentation

Voici une nouvelle revue, Nous ne la présenterons pas longuement au public, nous ne lui infligerons pas la lecture d'un programme pompeux et grandiose : nous demandons seulement à nos lecteurs de juger Sud d'après sa lecture et non d'après ses ambitions.

Une précision seulement : il ne s'agit pas ici d'une revue littéraire française mais d'une publication qui tient à demeurer africaine avant tout. Ce qui se passe dans le monde intellectuel de la Métropole nous intéresse, certes : mais nous le savons par les revues métropolitaines. Ici, il s'agit avant tout de notre Afrique du Nord : l'Afrique du Nord a désormais une vie littéraire et artistique bien à elle : nous voudrions être l'un des reflets de cette vie : c'est celle-ci que nous mettrons toujours au premier plan dans cette

revue.

Nous ne dirons rien de nos collaborateurs : ils portent, pour la plupart, des noms qui sont connus du public de l'Afrique du Nord. C'est une garantie pour notre public.

Ami lecteur, à toi de nous juger.

SUD.

II Le Dernier Jour d'un Mort-né

J'ai trouvé ce manuscrit dans un tiroir de la chambre d'hôtel où j'ai passé mes vacances. Sans valeur littéraire il m'a paru curieux. J'ai voulu connaître le nom, et le sort, de cet étonnant jeune homme, qui sentit le passage du dieu et ne sut le retenir : mais l'hôtel venait de changer de propriétaire et de personnel.

Et moi-même, écrivant ce conte après une nuit de sleeping, je ne compris nullement, d'abord, de quoi il s'agissait.

P. C.

Alger, 28-29 septembre 1931

C'est pour moi seul que j'écris ces lignes, et peut-être n'irai-je pas jusqu'au bout, car à quoi bon ? C'est seulement pour occuper ce jour trop long, et trop court, ce jour essentiel où s'accomplit mon existence.

J'ai dix-huit ans. Je me souviens mal de mon enfance, douce, sage et maladive. A douze ans, j'entrai en pension au collège de X... où je fus aussitôt un des meilleurs élèves : travail assidu, conduite irréprochable. Je refusais toutes les sorties, sauf parfois un déjeuner chez des amis : vieux ménage sans enfants. Je passais tout mon temps à l'étude que j'aimais sans savoir pourquoi : pour elle-même plutôt que pour ce que j'apprenais. Je voulais être le meilleur élève, sans avoir jamais examiné si c'était vraiment nécessaire.

J'avais des principes bien établis : Dieu, l'âme immortelle, vivre pour les autres, les plaisirs matériels très méprisables, etc... Bref, le jeune homme le plus rangé, le plus sérieux qui fût : et catholique pratiquant.

Mais j'en viens à aujourd'hui.

En vacances à R... Ce matin, excursion. C'est en descendant de la montagne que je rencontrai la jeune femme. J'ignorais qu'elle fût belle—je fus stupéfait de m'en apercevoir. C'est l'amour, me disais-je. Je me remémorais mes classiques, des bribes de romans ... rien qui fût pareil à ce que je sentais. Mes notions sur l'amour : élévation morale à deux, création d'un foyer ? Je ne voulais

rien de tel. Je la voulais.

Je la savais facile : nous liâmes conversation. Et mon désir surpassait infiniment l'amour, et ma joie était pure et totale quand je sentis ses seins, sur ma poitrine, s'écraser : sous mes lèvres, ses yeux, son cou, ses lèvres...

Bien serrés, tous les deux nous nous cajolions : d'une voix claire et douce elle me débitait des gentilleses et d'ironiques reproches. Je n'avais jamais connu cela : n'avoir aucune pensée, vivre uniquement par les sens ; en somme, l'impression que doit avoir un nouveau-né, pendant sa première toilette. Brusquement, ma mémoire fonctionna, me dit un mot : adultère ; une phrase : l'œuvre de chair de désireras... A ces idées vénérées, je sentis quelque chose monter en moi, jusqu'à ma gorge, j'étouffais... et j'éclatai de rire, brutalement d'un rire fou, inextinguible. Elle, effrayée, recula, et je repartis vers la montagne, courant, riant toujours,

Epuisé par ma course et mon rire, je tombe sur un rocher découvert. Je ne sais plus rien, ne perçis plus rien. De vagues images : Jc me représente naissant : une chambre, ma mère dans un lit, un docteur, un berceau blanc et moi, je ne sais où, avec ma taille et mon costume d'aujourd'hui. Le docteur parle. Jc n'entends pas ses mots, mais je sais qu'il dit que je ne vivrais pas. Et je pleure, je crie je veux vivre !

Puis des idées : je n'ai plus rien, je ne crois plus à rien. Impossible de vivre ainsi. J'ai tué en moi la Morale. Je n'ai plus de but, de raison d'exister, je vais mourir. En rouvrant les yeux, je vis sous moi la forêt immense, la rivière au fond et en face encore la forêt et les énormes rochers gris, là-haut, comme derrière moi. Je me levai pour mieux voir, comme si ge n'avais vu ce pays si émouvant. Alors. Le temps d'un souf fle, je me sentis confondu avec lui- j'en étais une partie : et une joie inouïe me dilatait, me fondait. Je voulais chanter, hurler de joie. Mais, aussitôt, je retrouvai mes tristes pensées, mon vide, mon impuissance. Je suis maintenant dans ma chambre. J'écris ces lignes. Calmé un peu, plus froid, mon état est pourtant le même. Ma raison refuse cette vie de joie que réclame... quoi ? mon corps ? On dirait que c'est ma conscience. Suis-je fou ? Ce soir, si je ne vais pas me jeter dans le torrent, c'est que ce moi nouveau, effrayant, sera mort pour laisser vivre l'ancien. De toute façon, il n'aura vécu qu'un jour : un mort-né, en somme.

(Sans date)